

『遺産』の文言を吟味する

(上)

佐々木 徹

Sasaki Toru

外国の文学作品を読んでいて——ここで言う「読む」とは、一字一句にこだわり、こまめに辞書を引き、テキストに専心する作業を指す——不可解なディテイルにぶつかると、われわれ日本人研究者はまず注釈に頼ることになる。『大いなる遺産』の場合、ノートン・クリティカル・エディションが突出して詳しいので、普通はこれとパロイシアンの手になる大部なコンパニオンを参照しながら読む。しかしながら、この2冊さえあれば大丈夫かという、そうでもない。それを証明する例を一つ挙げよう。たとえば、次の一節——

As to me, I think my sister must have had some general idea that I was a young offender whom an Accoucheur Policeman had taken up (on my birthday) and delivered over to her, to be dealt with according to the outraged majesty of the law. (Ch.4)

この **Accoucheur Policeman** というのがわかりにくい。ノートンの注を見ると、“**Accoucheur: male midwife. Here a policeman who serves as midwife in emergencies.**”とあり、緊

急のため警官が産婆を兼ねた、と説明されている。しかし、どう考えてもこれは怪しい。そこで他の注釈を片っぴしからあたってみる。ペンギン版には“**Accoucheur: a male midwife or doctor specializing in obstetrics.**”とあり、警官については無言。ワールズ・クラシックスは普及版の中では一番手抜きのエディションで、ここも注はなし。一味違うのが、大体において水準が高いエヴリマンで、ロビン・ギルモアは“**An accoucheur is a male midwife. Pip’s comic/ironic suggestion is that he has been considered an offender since birth.**”と説明し、これはジョークだと教えてくれる。同じことをもう少し明確に言っているのがブロードビュー版で——“**as though the male mid-wife were also an officer of the law and had arrested Pip at birth**”——ディケンズは **Accoucheur Policeman** などというものがあったかも存在するかのように書いている、との解説がある。

こうして調べていくと、**Accoucheur Policeman** というフレーズはどう考えても冗談である。警官が産婆を兼ねるなどというバカな話がありますか、とローゼンバーグ先生に言っていたところだが、面白いことに最近インターネットでこんな新聞記事を読んだ。2011年8月15日、タイ発の外信 (http://www.newsclip.be/news/2011815_031765.html)——「15日朝、バンコク都内ディンデンでタクシーの車内でミャンマー人の女性(22)が出産する騒ぎがあった。女性は産気づいたためタイ人の夫とタクシーに乗り病院に向かったが、渋滞につかまり、交通警官の助けを得て、車内で出産した。この警官が車内で赤ちゃんを取り上げたのは42回目だという。タイ字紙デーリーニュースなどが報じた。バンコクは渋滞で悪名高い上、公共の救急車サービスがほとんどない。私立病院の救急車を利用し

でも、サイレンを鳴らした救急車に先を譲る習慣がなく、急患にとっては厳しい環境だ。」何と、タイには **Accoucheur Policeman** なるものが存在するではないか！ ノートン版はまったく根拠のない嘘偽りを述べているのではなかったのだ。ただし、もちろん、ディケンズは交通事情の悪いバンコクを念頭に置いて『大いなる遺産』を書いたわけではない。

一方、パロイシアンによる、**Accoucheur Policeman** の説明を見てみよう。

The description of Pip as an offender from birth possibly derives from steps taken by midwives known as ‘guarding the bed’. Accoucheurs were male midwives, men with no formal training but experienced in assisting women at childbirth. Until the 1850s, the term *accoucheur* was applied to both women and men midwives, after which *accoucheuse* became increasingly popular. In preparation for a home birth, the mattress was covered with a large skin of red leather which was sold specifically for the purpose and came complete with tapes attached to each corner for fastening to the bedposts. Dirty, folded blankets and sheets were then placed on top of the leather. ‘The above plan’, medical authorities asserted, ‘will effectually protect the bed from injury’ (Chavasse, [*Advice to Mothers on the Management of Their Offspring*] 1843, 56). (55)

これはかなり見当はずれである。ここまでひどい例は少ないが、パロイシアンの注釈は往々にして要領を得ず、不必要な情報が多い。

こうして注釈本をいろいろ並べてみると、案外これらのエデ

ィターたちは勉強不足だということがわかる。つまり、先人の仕事をちゃんと調べていないのだ。実は、既に1986年に、グイリアーノとコリンズは、“**An accoucheur (French) is a male midwife. The narrator is suggesting that he was arrested at birth and delivered over to his sister for punishment.**” という明確な説明を与えていた。この *Annotated Dickens* という本は普及版ではないから、見逃すとか、手に入らない、ということ考えられる。それはそうだが、せめてギルモアのエヴリマンぐらいは参照すべきだろう。ペンギンとノートンの編者やパロイシアンは自分がよっぽど偉いと思って他の版は参照しなかったのか、それとも、ギルモアが間違っているとでも思ったのか。いずれにしても罪は重いと云わねばなるまい。

次に、もう一つ別のディテイルを取り上げよう。第13章で、ジョーはミス・ハヴィシャムからピップの徒弟奉公の契約金として25ギニーを受け取る。ところがそのすぐ後、ジョーはこれをパンプルチュークやジョー夫人に報告する際に、25ポンド受け取ったと言う。これはどういうことなのか？ この点について、シルヴェール・モノーは彼が翻訳した『大いなる遺産』のフランス語版において注をつけ、「ジョーの間違いというよりディケンズの間違いだ」と述べている。K.J. フィールディングも、モノーの意見に賛成して、“**No Doubt Dickens’s Mistake.**” と言い、グイリアーノとコリンズも、ディケンズの slip だと主張する。ペンギン版も、やはりディケンズうっかり説を採用。ノートン版は “**In the ensuing conversation guineas and pounds are used interchangeably. Either way, the riches Joe takes it for: roughly the equivalent of his half-yearly earnings.**” とするが、ポンドもギニーも **interchangeably** に使

っている主体がジョーなのか、ディケンズなのか、判然としない。一方、パロイシアンはこんな風に説明する。

A guinea was twenty-one shillings (1£ 1s 0d), making the actual sum £26 5s. Subsequently reported by Joe, followed by Pumblechook, as ‘five-and-twenty pound’, the change appears to indicate a shift in the social register: the guinea was considered a more gentlemanly amount than £1. You paid tradesmen, such as blacksmiths or carpenters, in pounds but gentlemen, such as artists, in guineas, a unit always specified for the rate of pay to the contributors of [Household Words]. The sum was a handsome gesture on two counts (127)

彼の説明はここからまだ5行も続く！ 例によって長たらしく、要領を得ない。「ジョーのような労働者は普段ギニーを用いない」と1行で言えばいいのに！ なるほどモノーたちが主張するように、ディケンズが25ギニーと書いたことを忘れて25ポンドと書いてしまった、という可能性は十分にある。(ディケンズ小説におけるこの種のエラーについてはまた後で触れる。) だが、ここはあえて少数派のパロイシアンの意見を支持して、ディケンズはわざとジョーに間違えさせているのだと考えたい。少なくとも、そう読んだ方が面白い。

ローゼンバーグのノートン版は作るのに30年かかったというだけあって、確かに詳細で、情報豊かなものだ。しかし、ローゼンバーグは困った人で、自分が機智に富んだ人間だとかたく信じて疑わない。フィリップ・コリンズは信頼すべき学者だが、彼がノートン版の裏表紙で“**Rosenberg is the wittiest and sprightliest of Dickensian commentators**”などと褒めるのは、

いくら宣伝文句とはいえ、どうかと思う。ローゼンバーグの真骨頂を示す例を一つ提示しよう。第10章でピップが「三人の陽気な船頭」亭に行くと、見知らぬ男がジョーと酒を飲んでいゝる。これはマグウィッチがよこしたメッセンジャーで、彼は鑪で自分の飲み物をまぜたりしてピップの注意を惹く。この点について、ローゼンバーグは以下のような脚注をつけている。

Dickens is being awfully high-handed in allowing the file to travel so freely among criminals. Very likely it would have been taken from the convict at the time of his capture in Chapter 5. Dickens’s textual disinfectant is discussed on p.449. (64)

この **high-handed** は「無茶な」、あるいは「強引な」という意味か。鑪がマグウィッチからメッセンジャーに渡されていた、というのは随分強引な話だ、とローゼンバーグはおそらく言いたいのだろう。マグウィッチが鑪を持って逃げたにしても、それは彼が逮捕された時に没収されるはずだから、その同じ鑪をメッセンジャーが持っているわけではない、というのは正しい理屈である。マグウィッチが逮捕された時に鑪を持っていなかったとすると、メッセンジャーが、マグウィッチが使ったのと同じ鑪を持っている可能性は、次に述べるような条件でしか発生しない——マグウィッチが流刑地のオーストラリアで、囚人仲間にかう言う。「おい、おまえ、今度イギリスに帰るんだろ。それなら、ちょっと頼まれてくれ。テムズの河口、監獄船の近くの湿地の、土手のくさむらの横、牛が三頭昼寝してるそばに、俺が十年前に使った鑪が落ちてるはずだ。それを拾って、村の鍛冶屋に行って、そこの坊主に2ポンド渡してく

れ。その時に鑪を見せるんだぞ」——つまり、ばかばかしいほどあり得ない話なのだ。だからここで説明をやめておけばいいのに、ローゼンバーグは言わずもがなのことをのたまう。上の引用の最後の文に、ディケンズの **textual disinfectant** という妙な表現がある。「テキストの殺菌剤」とは何ぞや？ ローゼンバーグはこれが **witty** な表現だと思っているのだろう。とにかく、彼の指示に従って 449 ページを見てみる。そこは巻末の付録で、ディケンズの改訂について詳細な説明がなされている（下線部分の **in** はノートン版の誤植で、**on** が正しい）。

We are left with one nifty detail — again Dickens kept it under wraps until 1861, when it must have struck him as an essential clue to the narrative, a dramatic foreshadowing that he should have thought of before. During his second encounter with Magwitch, Pip observes that “[Magwitch’s] eyes looked so awfully hungry, too, that when I handed him the file, it occurred to me he would have tried to eat it, if he had not seen my bundle.” [p.20] In 1861 Dickens introduced eight low worlds: “when I handed him the file, and he laid it down in [sic] the grass, it occurred to me he would have tried to eat it” — that is, it occurred to Dickens (but not until after the serial had run its run) that it would be expedient to plant the file where it can be picked by anybody who chose to lay his hands on it. When we next see the file (or its cousin), one of Magwitch’s connections dumbfounders Pip by using it as a swizzle stick, stirring his rum and rubbing his leg, in a very odd way.

ローゼンバーグはここでは **nifty detail** とか **under wraps** とか、わざと口語的な表現を用いて気取っている—— **nifty** はた

ぶん「巧みな」、**under wraps** は「隠す」「使わないでおく」の意であろう。要は、ディケンズは雑誌連載時には気がつかなかったけれども、単行本にする時にうまい具合に改訂したということらしい。しかし単行本の時まで「手の内を隠していた」というような言い方は奇妙なだけでなく、甚だしい見当違いである。ここでのローゼンバーグの論点は、ディケンズが後から付け足した下線部の 8 語はこの鑪という **essential clue to the narrative** を活かすための伏線になっているということだ。つまり、マグウィッチが鑪を下に置くのは後でそれを誰かが拾うための伏線だ、という主張である。誰かというのは例のメッセンジャーを指すのだろうが、それはあり得ない話だ。テキストの当該箇所を見てみよう。

I was soon at the Battery after that, and there was the right Man, — hugging himself and limping to and fro, as if he had never all night left off hugging and limping, — waiting for me. He was awfully cold, to be sure. I half expected to see him drop down before my face and die of deadly cold. His eyes looked so awfully hungry too, that when I handed him the file and he laid it down on the grass, it occurred to me he would have tried to eat it, if he had not seen my bundle. He did not turn me upside down this time to get at what I had, but left me right side upwards while I opened the bundle and emptied my pockets. (Norton, p.20)

家から食料と鑪を持ってきたピップはまずマグウィッチに鑪を渡す。マグウィッチはピップが運んできた食べ物に気がついて、草の上に鑪を置く。これは鑪を手にとっていたら食べ物を口に運べないから下に置いただけのことだろう。後で人がそれ

を拾うための伏線だとは到底思えない。実際マグウィッチは、2 ページ後で、“**The last I heard of him, I stopped in the mist to listen, and the file was still going.**”とあるように、ふたたびこの鑪を手にして鎖を切っている。もしもディケンズが伏線を意図したならば、この後に、マグウィッチが、「テムズの河口、監獄船の近くの湿地の、土手のくさむらの横、牛が三頭昼寝してるそばに鑪を置いた」とかいうようなディテイルを書き入れねばならなかったのである。

他人の注釈にケチをつけるのはこのぐらいにしておこう（実のところ、ローゼンバーグやパロイシアンに教わったことはたくさんあるので、彼らの仕事にはむしろ謝意を捧げねばならない）。『大いなる遺産』を精読していて、「ああ、この小説はよくできてるな」と感心させられるのは、さまざまなディテイルが意外な形で繰り返され、テキストの意味を増幅し、強調している点である。ピーター・ブルックスのやたら難しい指摘を待つまでもなく、この小説において「反復」が重要な意味合いを持っているのは明らかだ。ピップの人生にあつては、マグウィッチとの出会いが反復され、いかにこれが彼の人生に決定的な意味を持つかが浮き彫りにされている――

It was wretched weather; stormy and wet, stormy and wet; and mud, mud, mud, deep in all the streets. . . .

Alterations have been made in that part of the Temple since that time, and it has not now so lonely a character as it had then, nor is it so exposed to the river. We lived at the top of the last house, and the wind rushing up the river shook the house that night, like discharges of cannon, or breakings of a sea. (Ch.39)

これはマグウィッチがオーストラリアから帰って来る晩の描写で、ここでは冒頭ピップとマグウィッチが出会う湿地の「泥」に加えて、囚人の逃走を知らせる「大砲」の音によって過去の出来事とのつながりが強調されている。

We thought it best that he should stay in his own rooms; and we left him on the landing outside his door, holding a light over the stair-rail to light us down stairs. Looking back at him, I thought of the first night of his return, when our positions were reversed, and when I little supposed my heart could ever be as heavy and anxious at parting from him as it was now. (Ch.46)

また、上の部分では、テキストは意図的に第 39 章におけるテンプルの階段での二人の再会を思い起こすよう読者に求めている。こういう顕著な形での反復を支えるように、この小説には小さな反復がしばしばいつまっている。既に **hand** や **hanging** といった、繰り返し用いられるイメージについては語り尽くされているので、気づきにくい例を二つ示しておこう。たとえば、ピップはジョー夫人が切り分けたパンを食べる時、彼女のエプロンにささっている針を食べさせられる（第 2 章）。これを念頭に置いて、次の引用を読んでみる。

But Mrs. Pocket was at home, and was in a little difficulty, on account of the baby's having been accommodated with a needle-case to keep him quiet during the unaccountable absence (with a relative in the Foot Guards) of Millers. And more needles were missing than it could be regarded as quite wholesome for a patient of such tender years either to apply externally or to take as a tonic. (Ch.33)

〈針を食べる〉というモチーフが滑稽な形で繰り返され、ポケット家の赤ん坊もピップと同じ危機に瀕していることがわかる。子供を不幸にするひどい子育てが労働者の家庭のみの問題ではないという真面目な主題を、このテキストはなんとも愉快な形で提出しているのである。

あるいは、第19章で、**great expectations**を与えられたピップがロンドンに出ていく準備をするところ。彼はまずトラブの店で服を作る。その時、トラブは小僧を以下のように叱りつける。そしてすぐ後、ピップはパンブルチュークとワインでお祝いをして酔っぱらってしまう。

“Hold that noise,” said Mr. Trabb, with the greatest sternness, “or I’ll knock your head off!” . . .

I said he might, and [Pumblechook] shook hands with me again, and emptied his glass and turned it upside down. I did the same; and if I had turned myself upside down before drinking, the wine could not have gone more direct to my head. (Ch.19)

次にこの小説の冒頭、ピップとマグウィッチの出会いを引く。

“Hold your noise!” cried a terrible voice, as a man started up from among the graves at the side of the church porch. “Keep still, you little devil, or I’ll cut your throat!” . . .

The man, after looking at me for a moment, turned me upside down, and emptied my pockets. (Ch.1)

こうして並置すると、第19章のテキストの言葉は巧みに第1章の出来事を反復し、微妙な形でピップの過去を再現してい

ることがわかる。これは彼の **expectations** の背後にあるマグウィッチの存在を暗示し、彼の立身出世が昔の決定的な出来事の影響下にあることをほのめかしているように見える。これなどまことに細かい例であるが、僕にとってディケンズ小説の面白さは多分にこのような小説言語の不思議な振舞いの中にひそんでいる。ピップの人生において昔の出来事が反復されるように、このテキストの中にはいろいろな反復があり、読者はそれに機敏に反応するよう求められる。次に、この小説であまり注目されない場面を取り上げ、そこにいかなる反復が仕組まれているか、検証してみたい。

ミス・ハヴィシャムがピップに再三、“**Play, play**”と求める声は読む者の耳にこびりついて離れない。「プレイ」はこの小説の大事な構成要素であり、それに大きく関わるのがウォプスル氏である。氏によるリローの戯曲『ロンドンの商人』の朗読は、ピップを手にかけて育てた恩人ジョー夫人殺人未遂事件の呼び水となり、戯曲の主人公ジョージ・バーンウェルよろしくピップがそれについて責任を感じるという、〈罪の意識〉の主題展開に明らかに重要な役割を果たす。また、ウォプスル演じる『ハムレット』については、アレグザンダー・ウェルシュをはじめ、既にいろいろな批評家が考察を加えている。しかし、ウォプスルがからむプレイはもう一つある。第47章のパントマイムである。この場面を真剣に考えようとした論文は見たことがないが、このばかばかしい芝居も、滑稽な形ではありながら、メイン・プロットにおけるさまざまな出来事を反復し、全体の効果に寄与しているのである。

まず、この挿話が物語のどこに位置しているか、確認しておこう。

第45章 「家に帰ってはなりません」という警告を受け、ピップはコヴェントガーデンのハマムズ・ホテルに行く。その後、家は監視されている、とウェミックに警告を受ける。(後にわかるが、コンピysonが監視していた。)

第46章 クララの家に移動したマグウィッチを訪ねる。

第47章 ウォプスルのパントマイム。コンピysonがピップの後ろにいる。

次に、問題のパントマイムの描写を引く。長いので、日本語に訳しておく。

舞台の上には高潔な英国海軍の水夫長がいた。彼はまことにすばらしい人物だったが、ズボンに関して言うと、もう少し引き締まっていた方がいい場所と、もう少し緩い方がいい場所があった。寛大で勇敢だったが、帽子が目を隠してしまうまで背の低い連中の頭を叩いたし、愛国者だったが、誰が税金を払うことにも大反対だった。彼は布に包んだプディングのような、お金を入れた袋をポケットに入れており、これを頼みにベッドカバーに身を包んだ娘と結婚し、盛大な祝宴の運びとなった。ポーツマスの全住民(最新の統計によると総計九名)が浜辺に出て、自分自身の手をもみ合わせ、自分以外の全員の手を握り、「祝いの酒でグラスを満たせ！」と歌う。そこへ浅黒い顔の水夫が登場。彼はグラスを満たさないし、他のどんな提案にも乗らない。「おまえの心は顔と同じぐらい黒い」と水夫長は皆を前にして言う。水夫は全人類を苦難に落とし入れるべく二人の仲間を誘う。この計画は効果的に実行され(彼は政界にかなりのコネがある)、世の中

を元の状態に戻すのにその夕の半ばが費やされた。それを成し遂げたのは白い帽子、黒いゲートルに、赤い鼻の正直な小男の雑貨商だった。彼は鉄の焼き網を持って大きな振り子時計の中に身を隠し、耳を澄ます。そして外に出てくると、盗み聞きだけではやりこめることのできなかつた者全員を後ろから焼き網で殴り倒す。ここで、これまでお呼びでなかつたウォプスル氏がガーター勲章をつけてようやく登場。海軍本部からじきじきに全権特使として派遣されてきた氏は、悪者たち全員にすぐさま監獄行きを命じ、水夫長には勲功に対する感謝の印として国旗を持参してきたと告げる。水夫長は初めて男らしさを失い、恭しく国旗で目を拭う。それから元気を出すと、ウォプスル氏に閣下と呼びかけ、お手を取ってよろしいでしょうかと尋ねる。ウォプスル氏は威厳を見せながら優雅に許可を与える。すると彼は直ちに埃っぽい舞台の袖に押しやられ、中央で全員がホーンパイプを踊る。氏は袖から不満げな目で観衆を見まわし、私に気がついた。

二番目の出し物は今年のクリスマス・パントマイムの最新超大作喜劇だった。幕が開くと、遺憾ながらウォプスル氏らしき人物が、仰々しいメーキャップを施したてかてか光る顔に、赤いカーテンの切れ端を髪の毛代わりにくっつけ、足には赤い毛織の靴下をはいて、鉾山の中で稲妻の制作にいそんでいた。巨漢の師匠が夕食を取るために(声をからして)帰ってくると、彼はひどくおどおどした。しかし、程なく彼はもっと立派な姿を見せる。無知な農夫が横暴な父親ぶりを発揮して、娘が選んだ結婚相手を認めず、二階の窓から小麦粉の袋をかぶって彼氏の上に飛び降りたため、「若人の恋愛をとりもつ妖精」が助力を求めて、大層な話しぶりをする魔法使いを呼び出したのだ。これが今や独り立ちしたウォプスル氏だった。山高帽をかぶり、一卷本の魔術大辞典を脇の下にはさんだ彼は、明らかに波乱万丈の旅の後、足元をふらつ

かせて地球の反対側から地下を通して到着。魔法使いの地上での使命は主として人々が彼に向かって叫び、歌い、踊り、突っかかってくる中、さまざまな色の炎で照らされて立っていることであつたから、彼には暇な時間がたっぷりあつた。その間中、彼は度肝を抜かれたように目を大きく見開いて私の方をじっと眺めていたものだから、こちらがすっかり驚いてしまった。

この晩のウォプスル氏のパントマイムは二本立ての上演で、最初は海洋メロドラマのパロディーである。最初にポーツマスの浜に住民が出てきて主人公の結婚を祝福する。第 39 章に明らかのように、ポーツマスはオーストラリアから帰ってきたマグウィッチが上陸した港であつた。上の引用の終わりから 7 行目を見ると、ウォプスル氏は「地球の反対側」(antipodes) からやって来る。これは舞台の trapdoor から上がってくることを表しているのだが、ここでわれわれは、ウェミックがピップにジャガーズの底深さを説明する時に、オーストラリアみたいに深いと言って事務所の床を指し、この国が地球の裏側にあることを示していたというエピソード(第 24 章)を思い出さねばならない。そうすれば、antipodes からの人物の登場は〈マグウィッチの帰還〉をほのめかしているとわかり、ますますウォプスルのお芝居が物語の本筋に関わっているという印象が強まるであろう。

そうすると、気にかかるのが上の引用の「ポーツマス」の 3 行下にある「浅黒い顔の水夫」(dark-complexioned Swab) という表現だ。この swab について、ローゼンバーグは naval officer or sailor と言う。確かに OED も両方の意味をのせて

いる。しかし、一体どっちなのだろう？ ギルモアは黙して語らず。パロイシアンは士官、グイリアーノとコリンズ、およびペンギンは水夫だと主張する。ブロードビュー版は、驚いたことに Neglo sailor と断言している。「水夫」が多数派なので、訳では「浅黒い顔の水夫」としたものの、かなり未練が残る。なぜなら、これは「士官」と考えた方が面白いからだ。この人物はポーツマスの浜辺で祝宴を開いた男——つまりマグウィッチを連想させる人物——に楯突いて邪魔をする。これが士官だとすれば、当然ジェントルマンであり、いきおいコンピソンを想起させる。さらに、「彼は政界にかなりのコネがある」(considerable political influence) というのがジョークでなく、文字どおりに解釈できるなら、マグウィッチがコンピソンのジェントルマンぶりを見せつけられる例の裁判(第 42 章)のくだりを思い起こさせる。いや、何より、この芝居をピップの気づかぬまま彼の後ろでコンピソンが見ている、という事実を思い出さねばならない。ピップは自分の後ろにコンピソンがいることを知らない。そして、彼は自分の目の前の舞台の上で繰り広げられる物語の中にコンピソンが隠れていることにも気づかない。こういう状況がここで設定されていると考える方が、アイロニックで面白いのではなかろうか。だから swab を士官と読む解釈は捨てがたい魅力を持っているのである。

ウォプスルのお芝居はこの点以外にも、ピップの物語におけるいくつかのエピソードを再現している。第一段落の真ん中あたり、「正直な小男の雑貨商」が出てきて、悪者たちを背後から焼き網(gridiron)で殴り倒す。この〈背後から金属で人を殴る〉というのは、この後第 53 章で明らかになるように、ま

さにオーリックがジョー夫人に対して行ったことである（またしても、ピップの気づいていないドラマ！）。

続いて、ウォプスル氏の二番目の出し物は、いわゆる“sorcerer’s apprentice”というネタの芝居。氏は魔術師の見習いを演じているが、魔術師といえば、ピップがミス・ハヴィンシャムを *witch* と呼んでいたことや、*great expectations* という幻想をピップに抱かせるマグウィッチ (Magwitch) がその名前に魔術師 (*witch*) という語を含んでいることを読者は思い出す。そのウォプスル扮する見習い魔術師は、やがて劇中若いカップルの恋愛を助けることになる。この若い男女の恋の道のりには、女の父親が立ちほだかり、彼は小麦粉の袋をかぶって二階から男にとびかかるといふわけのわからない攻撃に出る——〈恋人たちを襲う頭上からの脅威〉である。そのように理解した時、われわれは直前の第 46 章で、ピップがハーバートの恋人クララの住む家を訪れていることを思い出す。そこにはクララとハーバートが結ばれるのを邪魔している彼女の父親がいた。彼は二階に住んでおり、二階から木製の義足でハーバートとクララ、ならびにピップを攻撃してくる (“as if a giant with a wooden leg were trying to bore it through the ceiling to come at us”)。まさに、〈恋人たちを襲う頭上からの脅威〉そのものであり、ウォプスル氏のパントマイムはこれを戯画化しているのである。

(本稿は 2011 年 10 月 15 日京都大学で行われたディケンズ・フェロウシップ日本支部総会での講演『大いなる遺産』について)に基づく。

〈参考文献〉

- Dickens, Charles. *Les Grandes Espérances*. Trans. Sylvère Monod. Paris: Garnier, 1959.
- . *Great Expectations*. Ed. Edward Guiliano and Philip Collins. *The Annotated Dickens*, 2vols. London: Orbis, 1986.
- . *Great Expectations*. Ed. Margaret Cardwell. Oxford: OUP, 1994.
- . *Great Expectations*. Ed. Robin Gilmour. London: Dent, 1994.
- . *Great Expectations*. Ed. Charlotte Mitchell. London: Penguin, 1996
- . *Great Expectations*. Ed. Graham Law and Adrian J. Pinnington. Peterborough, Ontario: Broadview, 1998.
- . *Great Expectations*. Ed. Edgar Rosenberg. New York: Norton, 1999.
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot*. New York: Knopf, 1984.
- Darby, Margaret Flanders. “Listening to Estella.” *Dickens Quarterly* 16 (1999): 215–29.
- Fielding, K.J. “The Critical Autonomy of *Great Expectations*.” *Review of English Literature* 2 (1961): 75–88.
- Garnett, Robert G. “The Good and the Unruly in *Great Expectations*.” *Dickens Quarterly* 16 (1999): 24–41.
- Paroissien, David. *The Companion to Great Expectations*. The Banks, East Sussex: Helm Information, 2000.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1983.
- Welsh, Alexander. *Hamlet in His Modern Guises*. Princeton: Princeton UP, 2001.

(京都大学教授)